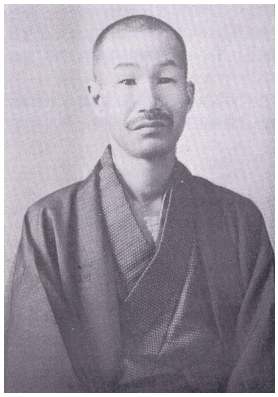
伊良子清白（いらこせいはく）



明治 10 年 10 月４日～昭和 21 年１月 10 日（1877－1946 年）。詩人。

本名暉造（てるぞう）。別号すずしろのや。

鳥取県八頭（やず）郡八上（やかみ）村（現・河原町曳田（ひけた）に生まれた。２歳で母を失い、のちに医者の父にともなわれて三重県に転居。津中学をへて、明治 32 年京都府立医学校を卒業。出京して伝染病研究所、東京外語学校ドイツ語科に学び、日本赤十字病院に勤務。医学校在学中から河井酔茗（すいめい）と往来して「文庫」「青年文」に寄稿し、当時大阪で発行された「よしあし草」に執筆して関西における詩歌革新運動に参加。

河井酔茗、横瀬夜雨とともに文庫派の三羽烏と称された。また、京都時代からの友人与謝野鉄幹の「明星」初期の編集に参与した。明治 39 年５月、多くの作品中からわずか 18 編を厳選した詩集『孔雀船』を出版。同時に東京を去って詩筆を折り、島根県浜田の病院に赴任後、さらに大分、台湾、京都などをへて、大正 11 年に鳥羽小浜に医を開業した。

昭和３年に夜雨、清白生誕 50 年祝賀会の催しに上京し、旧友と再会して詩壇に復帰した。短歌雑誌『白鳥』の選者となり、昭和 17 年の終刊号まで指導者として関わる。晩年は短歌をつくって自適したが、太平洋戦争中に空襲を避けて移った三重県度会郡七保村で没した。

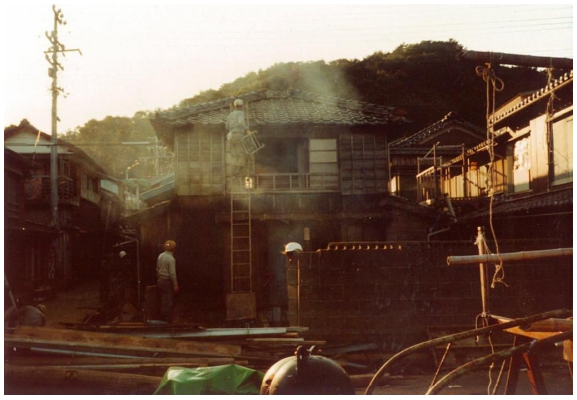
詩集が『孔雀船』一冊だけであったこと、詩壇を早く去って転々と地方生活をしたこと、加工的な詩作の息がきれたこと、孤高の性格と環境とから晩年は一医師として暮らしたことなど、不利な条件があったが、日夏耿之助、北原白秋、西条八十らの絶賛をえて『孔雀船』は、昭和４年に再刊され、ついで岩波文庫に収められた。その詩風は日本古典の伝統を踏んでしかも鮮麗であり、彫刻的な美を見せている。「漂泊」、「安乗の稚児」が傑作とされている。

伊良子清白の家について

清白は大正 11 年に小浜の町医として、鳥羽の地にやってきて、この家で、診療所兼住宅として昭和 20 年に戦火を逃れるため旧大宮町（現大紀町）打見に疎開するまでの約 23 年間をこの家で過ごしました。この家は諸般の事情により、個人の尽力により三重県多気郡大台町に移築されましたが、平成 21 年に再び鳥羽の地へ移築されました。

鳥羽市小浜町に所在時の旧清白邸
（昭和 54 年頃）

旧清白邸よりみた風景（奥が答志島）



小浜の建物解体風景（増田雄一氏提供）

昭和５４年に土地と建物が売却され、保存の危機にありましたが、会社役員のかたが、建物の譲渡を申し出て、自費で三重県多気郡大台町に移築しました。

大台町に移築時の写真

鳥羽へ再移築前の建物

平成 20 年に、移築者の親族より建物の寄贈を受け、平成 21 年に小浜への移築は叶いませんでしたが、再び鳥羽の地へ移築されました。

移築工事中の伊良子邸

清白の家の紹介

一般公開している伊良子清白の家についてご紹介します。

外観

玄関先の診療所の待合室跡

清白一家が過ごしていた居間

診療所の様子を再現しています。

庭の芝生は伊勢志摩の地形、玉砂利は海を表現しています。

庭の桟橋には清白について紹介したパネルを設置しています。

【清白の家へのアクセス】

鳥羽駅（山側）の出口を出て、東（海側）の方向へ徒歩３分。赤福鳥羽支店の隣です。